

- 企業内学校ではどのような教育が行われているか。
△人間そのものを尊重する。自ら目標を持ち、自ら計画し実行し、自ら control する労働のあり方を工場内に作っていく。これは management revolution と呼ばれるものである。向上心のある者には教育を受ける機会をどしどし与えている。

<渡辺氏への質疑(○)と答(△)>

- 小林氏の先生こそ大切だという意見と、渡辺氏は黒板と本だけの教育ではだめだという意見とをどう関連させるか。
△難しい問題だが、表現の違いということがあがる。私は方法を主体にして話したのだが、人間的触れ合いが重要な場面もある。
- 教育設計者と教師との分離は教師のロボット化をもたらさないか。
△俳優がロボットではないと同様に教師が単なるロボットになることはない。しかし逆に設計がしっかりしていれば、ロボットでも教育ができるということは言える。
- 権力者が教育内容を統制することが容易にならないか。
△統制はしやすくなる。そこで同時に教育を評価する方法を普及しなければならない。
- 中学校技術科は改訂を必要としないか。
△技術科が今後の中学校教育の中心になるべきだと思う。小中学校教育はいわばレジャー教育が多すぎる。他人の幸福、人類の幸福を作り出そうという使命感・成就感を教えることが技術科の役割である。

<広岡氏への質疑(○)と答(△)>

- 基礎学力を身につけるための学習過程はどんなものか。
△発見学習である。知識の結果を教えるのではなく、知識の結果が出てくる過程を教える。時間がかかる欠点はあるが、応用力をつけるのには優れている。

<創造力をめぐって>

渡辺氏は創造力とは、動物にみられるように教えられずに自分でやっていく力であると言われ、それに対し小林氏は、創造は教えられなくともできるが、実際には知識が前提としてあり、あるものの上に新たに築いていく力であるときれ、創造の他の概念として、内にあるやむにやまれぬ力、使命感であり、これこそ人間の motivation の根源であるから、これを欠く動物には創造力はないと反論された。

最後に小林氏が人間が組織の歯車になってしまいがちである今日、これを防ぐためには意思の疎通が重要

であり、その意味で国語をもっと大切にしたいと付言された。

6. その反響

6-1 参加者へのアンケート

研究会終了後、参加者の中から抽出で100名ほどの方々に下記のようなアンケートをおくり、感想や希望を寄せていただいた。(ご多忙のところ御返事をおよせいただいた方に厚く感謝申しあげたい。)回収率は41/100であった。うちわけは次の通りである。

- A…教育委員会・研究所・センター・附属学校関係
- B…中学校関係。C…高等学校関係。

(以下、A・B・Cと略記する)

- A…13, B…14, C…14

そのアンケートをまとめた結果を以下にかかげ、その反響を明らかにし、今後の参考にもしたい。

I 参加しての感想

①シンポジウムA・現場からの提案(第一日午前)
主題一貫し(A)、中高連関の下で(A)の研究会で、着想(B)や思い切った提案(C)があり、切実でありながら現場ではとりくめない問題について(C)自由な研究をすすめてくれて(C)よかった。

が、時間不足のため、一方通行で、討議が不十分で焦点ボケてしまった。(A・B・C)。高校中心(A・B)の傾向が強い。一般的で、実践のうらづけによる資料が欲しかった(B)。総花的(C)で、多忙な現場から遠い研究である(C)。

②主題別分科会(第一日午後)

問題点はユニークで(A)、鋭角的(B)、適確(C)であった。中高一貫した問題を中高両方の教師が一堂に会して話しあったのは意味があった(A・B)。進学=進路と考えていない態度がよかった(C)。世界の動向についての研究紹介は有益であった(C)。

が、時間不足(A・B・C)で、高校中心が不満(A・B)。アカデミックすぎ(A)、一般的(B)で、もっと実践成果を具体的に示して欲しかった(A・B・C)。机上の研究のようで、現場への適応性に疑問多く(C)、日常の教育活動(授業、生徒指導など)とどの程度結びついているのか?(B)。

③教科および生徒指導分科会(第二日午前)

継続的な研究(A)で、鋭角的(B)、冒険的なところ(C)で、ナレアイでない研究態度(B)はよかった。中高一貫の問題もよい(A)。

が、時間不足(A・B・C)で、もっと討論時間が欲しかった(B・C)。高校中心(A・B)、アカデミック的一般論(A)で、総花的(B)。実践成果をも

っと具体的に(A・B・C)示して欲しかった。公開授業も欲しかった(B・C)。教科内がバラバラの感(C)もあった。教科内容に詳しい助言者が欲しかった(B)。

④シンポジウムB(学者・産業界からの提言)

思いがけぬ面(A・B・C)を、とらわれぬ発想から(A・B・C)、立場のちがう三人三様の角度から(B・C)示してもらえて、大いに啓発された。

が、問題点の討議が不十分(B・C)で、内容の具体化までいけず残念(B)、要旨集にもっとくわしくのせておいて欲しかった(C)。政治的視点が欠けていた(C)。

II 今度の研究会でとりあげた問題について

①現場(自分の学校)の立場からみて――

新しい視点(C)から、多忙で(B・C)、そういうことは管理職層の間でしか問題にならぬテーマをとりあげてもらって(B)、大いに得る所多かった(C)。

が、貴校の実態をもっと浮きぼりにしてもらいたかった(A)。高校中心すぎた(A)。もっと具体的方法・授業にまで迫ってもらいたかった(B)。

政治的・制度的視点が欠け(A・C)、現実とのズレがある(A・B・C)。たとえば、制度・格差・劣等感の問題(C)、非行(B)、マンモス学校との断層(C)、能力差のもっとひどい学校(C)など。また、多様化によって生ずる問題点が不足(C)。

能力別について……現在現場では能力別編成は解消される所が多いのだが(C)……。

②現在の社会の状態や要請からみて――

今まで無関心だった近代化・現代化に切実感をもたされた(C)。技術学・思考の科学の提案は大いに興味深し(C)。足もとからの現代化を考えたのはよい(A)。まことにもっとも同感(B)。

が、他方では――

技術革新が過大に映っている感じ(A)。

情勢の切実さに反してのんびりしすぎている(A)。

多様化一分離案賛成には疑問あり(A)。

教育による社会改造の視点がもっと欲しい(B)。

政治・産業におし流される教育を正す姿勢なし(C)。

主知主義的すぎる(A)。

マンモス学校には適用できない(B)。

意図はよいとして実施例少なく、空論で地についていない感じがする(B)。

教育工学・カリキュラムの問題をもっと大きくとりあげて欲しかった(C)。

③今後とりあげる問題にはどんなものがあるか。

今のテーマを具体的実践によって深化して欲しい(A)。

研究協力校を作って意味のある仮説を一(A・B)。

思考ののぼし方(B)を追求し、技術学・思考の科学を検討して行ってほしい(C)。

教育工学(A・C)、授業過程(A・B)指導法改善(B)。

現場の具体的実践的問題(A・B)

指導要領の要求と生徒の実態との断層(C)

中・高の連関(A・B)

「道徳」特別教育活動のあり方(A・B)

純潔教育(B・C)

非行・ノイローゼの対策(B・C)

作業(清掃)の指導法(C)

クラス集団と個人(B)

集団教育(B)

能力差に応じた指導体制(A)

高校多様化に伴う中学のあり方(B)

教育大衆化の中でのカリキュラム(C)

単位認定基準(劣等生対策)(C)

学校制度の再検討(A)

教育課程改訂の問題(B)

入試制度と学区制(C)

望ましい未来像(A)

政治経済に流されようとする教育を正す研究(C)。

III 研究会の運営について

1. 見学については、なくてもよい意見が多数であった。遠来の方もあり、見学の案内もという校内意見があったが、かえってお祭り騒ぎでない地味な研究であって好感がもてた、という意見(B)もあった。

2. 公開授業については、多数の方からぜひやってほしいという意見があった。附属の研究は実践に結びついたものがほしいので、授業を通して、いくらかでもその実態度に触れたい(A)という感想があった。

3. 名士講演はあった方がよいという意見が多数であった。本年は名士のシンポジウム形式の討論であったが、賛意は多かった。

4. 資料は十分であった。全資料をまとめたら約400頁になり膨大なものになった。ただし、資料の印刷形式がまちまちであったので、保存資料としてはもっと統一すべきであるという意見(校内)もあった。

5. 要旨集も十分であったとおほめをいただいたが、要旨をできれば早く配布(送付)できないかという意見(C)と、シンポジウムBの内容も詳しくほしい意見(C)もあった。

6. 受付・接待についても、当日不慣れのため、いろいろご迷惑をおかけしたにも拘らず、謝意をいただ

き恐縮している。

7. 時期については11月を要望される声が多かった。一方ではシンポジウムの会場である体育館が寒いという苦情もある。

8. その他運営上施設面では学校の環境が十分整備されていない(A)、体育館の音響効果に難あり(A・B・C)、進行上では討議時間の不足(B)、昼食時間が長過ぎた(B)、分科会運営については、発表は短かくきりつめ、討論の時間を多く(C)、提案者は別席にした方がよい(A)、中高別学科別にもう少し分けられないか(C)、発表内容が高校教育に偏していないか(B)、その他の面では、図書館に研究物一覧を展示しておいてほしい(C)、二日間も出張できないから一日でできないか(C)、参加者名簿がほしい(C)、教科別分科会と、生活指導の分科会を平行させないでほしい(C)。

以上いろいろ当方の不手際を忠告いただいたが、賛意では運営の流れ<シンポジウムA、一主題別分科会—教科別分科会—シンポジウムBは見事だ(A)、分科会の協議内容速報はよい(C)、参加者へのアンケートには敬意(C)を寄せられた方もいる。

IV 本校の大学付属校としての研究と研究会のあり方

たいへん骨の折れるアンケートであるが、率直な含味すべき次のような意見を得た。

現場との結びつきについては、うすいから、もっと県南と交流するように(B)今後の研究会に外部発表者をどのようにしたらよいかとの意見に、同一テーマ、同一方法の研究でなければ意味がうすい(A)、依頼発表も含めてよい(A)、研究協力校をつくれ(B)その他、附属は大学の理論の検証の場である(B)、自由な研究雰囲気はよい(B)、技術学と思考の科学を深めよ(C)などがあげられる。

6—2 校内へのアンケート結果

1. 研究部に対して、

今回の研究会の裏方である研究部に対して、その労をねぎらってもらったものの、研究会準備のスタートが遅れたことが、直前に負担が大きくなった。発表要旨については、最小限の内容でよかったではないか。むしろ、内容形式を統一したタイプ印刷でも可。ぜひ参加者名簿を作れとの意見もあった。

2. 主題別分科会について

A：今後とりあげてほしい事項として、技術学(高校)思考の科学の具体化、理数科コースの問題、TM AV教育の管理と方法の再検討である。これらの討論は、かなり活発で、一般に大きなものを与えたようだ。
B：生徒指導に関する討論では、全教官の生徒指導の

統一、道徳教育の問題点、生徒指導の内面化について
C：中学校の生徒指導が手薄になっているからもっとウェートを、要するに、生徒のために役立つものなら何でもとりあげようという意見が多かった。

D：進路指導については、来年度の高校の進路指導体制をいかに強化するかという問題、例えば校務分掌中に部の新設をはかる。能力差の多い本校高校のコース別カリキュラム(能力別学級の授業)をつくる。

C. E.折角整備した規則類の整備保管のひきつきなどが、校長交代でどうなるかそのメドをつけようなどである。

3. 教科の研究に対して

十分な資料と準備をして研究発表をするようにしよう。教科の分科会には全員参加して、本校として、対外的に打ち出せる統一見解がほしい。感想として、研究不足、殊に実践の結果が発表できず残念、討議時間の不足、他校教官の発表を加えた方がよい。

4. 研究会について時期は10月くらいがよい、11月では寒い。学部とは常時研究組織の一員(顧問)として、密接な連繫をとる。本校の研究実態をもっとPRする必要がある。研究会参加者へのPRを一考すべきである。研究発表内容の精選と、書式の統一を、シンポジウムBはよい。

そえがき

今度の研究会について、今までのアンケートで出ていなかったもので、今後の参考のために書きとめておいた方がいいと思われることをいくつかうけ加えておきたい。

① 速報と質問紙

各分科会に分散して討論した内容を全参加者の共有財産にする全体会をもつ余裕が計画できなかったのだ。それを補うために速報を2回出したが、喜んでいただけたようである。

シンポジウムA・Bで、討議時間が少ないのをカバーするために、前もって質問紙をくばっておいて(袋に同封)提案が一応すんだところで集め、整理して司会者にわたした。一応問題点は出そろったことはできたようであったが、その処理のしかたは今後もう少し考えてみたい点もあった。

② 要旨集

要旨はもう少し早く、簡単な内容で作ること。(そして参加希望者に送付するという点も考えてよいかも知れない)。

③ 高校教育課程の改訂についての意見

文部省より高校教育課程の改訂について、本校に対して意見を求められていた。たまたま本校で研究会を持ったので、その結論もあわせ意見として送付した。

その後、日経新聞に文部省の関係者がこの課程の改訂に関する発表の中に、本校からの回答にもとづくものが述べられているのが掲載されていた。

④ 感謝とお詫び

われわれの予想以上に、遠方からも沢山のの方々のご参加をいただき厚く御礼を申し上げたい。また講師・助言・司会および発表をいただいた方々には、ご多忙のところとくに本校の研究会のために、いろいろご準備やら、お骨折りをいただき、お蔭で盛会裡に終ることができ、あらためて御礼を申し上げたい。しかし、主催校として、誠に準備不行き届きが多く、折角のご尽力に対して十分にお応えできなかった憾みを、お詫

び申し上げる。とくにシンポジウム会場での放送の不調と寒さをはじめ進行を急ぐあまり熱心な協議時間を中断したりしたことは、先ず以てお詫び申し上げたい。その他われわれの気付かないところに、多々の失礼があったと思うのでお許し願いたい。また観光パンフレットなど、直接・間接にお骨折りいただいた方、会のために器物をお貸しいただいた方などにも感謝したい。おわりに研究会についてのアンケートをお寄せいただき、暖かい励ましと、忠告とをいただいた方々に御礼を申し述べ、本研究会の報告の筆をおく。

(中尾・加藤貞)

本校教官の研究活動記録 (抄)

本校教官の昭和42年1月以降同年12月末までの研究活動の記録である。 <発表者名アイウエオ順>

A. 口頭発表

織田長繁

1. 世界史の問題点<東洋史を中心に>全国付属連盟高校部会 (於東京教育大付高)

加藤貞夫

1. 基礎的概念<酸化・還元>文部教研名瀬地区大会 (於愛知県立昭和高校) 昭和42.8.18
2. 酸化・還元教材の指導, 第17回日本理科教育学会全国大会 (於千葉大学教育学部) 昭和42.10.13
3. 理科教育文献抄録誌の作成, 第15回日本図書館学会 (於名古屋市教育館) 昭和42.11.12

加藤十八

1. 高校入試における中学校の報告書の検討, 付属連盟東海支部大会 (於三重大学付属中) 昭和42.8.20

倉田有邦

1. 発表力の指導<とくに英作文における中・高のつながりについて>全国付属連盟高校部会 (於東京教育大付高) 昭和42.10.27
2. 発表力をのばすにはどうしたらよいか<シンポジウム提案>全国付属連盟高校部会 (於東京教育大付属高) 昭和42.10.28

戸苺進

1. 前期中等教育理科における化学カリキュラムの現代化に関する提案, 付属連盟東海支部大会 (於三重大付中) 昭和42.8.21
2. 内面化をねらった生徒の管理・指導, 全国付属連盟高校部会 (於東京教育大付高) 昭和42.10.27

中尾正三

1. 倫理社会の教科構造の比較分析, 全国付属連盟高校部会 (於東京教育大付高) 昭和42.10.27

藤田佳久

1. 中学1年における地理的知識と地理的認識について, 付属連盟東海支部大会 (於三重大付中) 昭和42.8.21
2. 教科書における第1次産業教材 (とくに林業) の分析と考察, 全国付属連盟高校部会 (於東京教育大付高) 昭和42.10.27

B. 掲載論文

藤田佳久

1. 素材供給弾力性の地域的差異に関する若干の考察, 林業経済1967.3
2. 名古屋市場に対する製材品の供給圏について, 人文地理1967.3
3. 大井川上流域における大山林所有の成立, 人文地理1967.5

C. 出版

- 加藤貞夫 (編集責任) 理科教育文献抄録誌 No.1. 日本理科教育学会, B5, 92頁, 昭和42年3月20日刊
 高森 充 中学校における道徳教育<田浦武雄・江藤 恭二編道徳教育の探研究所収>川島書店, 昭和42年4月20日刊
 中尾正三 高等学校における道徳教育<同上>同上

D. その他

加藤貞夫

1. 日本理科教育学会委嘱研究費 (24万円) 理科教